談話標識の談話戦略的使用

松　尾　文　子

要　旨

The aim of this paper is to demonstrate that discourse markers are frequently used strategically for facilitating communication. What speakers can do by using discourse markers are as follows. Speakers can communicate their intentions or attitudes of utterances effectively, take the relationship between speakers and listeners into consideration and save listeners' face, and take the initiative of the conversation to keep control of the flow of discourse. Discourse markers make a great contribution to achieve the main purpose of communication, that is, to succeed in social interaction.

キーワード：談話標識、談話戦略、コミュニケーション、face

1．はじめに

ことばによって私たちは何を伝えようとし、使われたことばをどのように解釈するのだろうか。ことばによって紡がれるテクストには書き言葉もあれば話し言葉もある。話し言葉と比べると書き言葉は概して、伝えられる情報の内容が重視される。一方、話し言葉、特に会話は情報の内容が重要であるのは言うまでもないが、それに加えて情報をどのように伝えるかにも重点が置かれる。Smith & Jucker (p. 233) では以下のように述べられている。

> ... in conversation in which the goals are principally focused on social interaction rather than accomplishing some context-based task, there may be more negotiation of perspectives, whereas in other contexts there may well be relatively more negotiation of context.

書き言葉であれ話し言葉であれ、私たちはさまざまな知識、言語学的に言えば広義の文脈をもとにことばを使う。話し手（書き手）と聞き手（読み手）双方の持つ文脈によって、当然ことば

の使い方は変わる。Sperber & Wilson や Blakemore は認知語用論的観点から、文脈とは話し手（と聞き手）の世界についての信念と仮定であり、発話を行ったり解釈したりする際に記憶の中から呼び起こすことができるとする。視覚情報など五感によって得られる情報や、推量で得られる情報も含まれる。具体的には先行発話、特定の事物についての記憶、一般常識や百科事典的知識、さらには話し手の精神的状態に関する仮定や話し手自身の精神状態を他人がどのように見ているかに関する仮定もある[1]。話し手の精神状態、すなわち心的態度に関する情報を伝達するのに寄与するのが、本論で扱う談話標識であると考える。

Blakemore（p. 21）が言うように、コミュニケーションは危険を伴う作業である（Communication is risky business.）。話し手が意図しているのだと聞き手が思うことが本当に話し手が意図したことであるということを保証する 100%安全な方法はない[2]。本論では常に危険を孕んでいるコミュニケーション、特に会話をうまく進める（facilitate）ために、すなわち会話のゴールである social interaction を首尾よく達成するために、談話標識が戦略的に用いられることを論じる。

2．話し手の策略

話し手は通例、自分と聞き手の共有知識は何かということを意識しながら会話を進める。聞き手が知らないと思われる情報は新情報として提示されるが、聞き手が知らないと分かっていながら当然知っている旧情報（共有知識）として情報を提示することがある。日本語でも、「分かっているとは思うけれど；ご存じのように」と前置きされると、聞き手は反論が困難で、不本意ながらも納得するしかない。談話標識 after all がこのように用いられることがある。

after all は通例文頭や文尾で、先行発話で示される内容の判断の根拠となる理由や説明を付け加えて、「だって[何しろ] …だから」の意を表す[3]。because も理由を表すが、because が聞き手が知らない（と話し手が考えている）新情報を理由として述べるのに対して、after all は話し手と聞き手が共有している（と話し手が考えている）旧情報として理由を提示して確認する（Schourup & Waida, pp.16-19）。例を見よう。

Caroline は一流会社の役員、Chris は名門出身の州議会議員で上院議員に立候補している。2 人が宿泊しているホテルのメイド Marisa が、Caroline の部屋を同僚のメイド Steph と一緒に掃除した。Steph は Caroline から返品を頼まれたスーツを見つけ、Marisa にむりやり着させる。スーツを着た Marisa を見かけた Chris は彼女をメイドとは思わずに声をかけ、Marisa は思わず自分は Caroline だと言ってしまう。しかし Marisa が Caroline のスーツを盗んで着たことがばれる。それを知ったホテルの支配人は Marisa にクビを宣告したが、Chris はそこまでしなくてもよいと言う。部屋を出た Chris を Caroline が追いかける。「屈辱」とは、Caroline に

とってはスーツをメイドに盗まれて自分になりすまされたこと、Chris にとってはメイドである Marisa に騙されていたことである。

（1）Caroline：Oh, Chris. Oh, Chris. I can't help but feel that this is partly my fault.
Chris：It isn't. Spare yourself.
Caroline：Well, at least let me buy you lunch. *After all*, we've only got each other to get through this... humiliation.—*Maid in Manhattan* [映画台本]「ねぇ、クリス、クリス。私にも落ち度があるのは間違いないと思うわ」「そんなことない。そう思わなくていいよ」「じゃぁ、せめて昼食をごちそうさせて下さい。だって、私たちお互いこの…屈辱を乗り越えて行くしかないんだから」

Caroline は after all 以下の理由を Chris も共有しているかのように提示して、昼食をごちそうさせてもらえるよう説得している。

次例の Katherine は Tess が勤務する証券会社の上司で、出世コースを歩むエリートキャリアウーマンである。Katherine は新たに Tess の上司になったばかりなので、Tess は Katherine の恋人のことを含め彼女のことはほとんど知らない。

（2）Katherine：He said there was something very important he wanted to discuss with me. I think he's gonna pop the question.
Tess：You do?
Katherine：I think so. We're in the same city now. I've indicated that I'm receptive to an offer. I've cleared the month of June. And I am, *after all*, me.—*Working Girl* [映画台本]「彼、私と相談したいとても大切なことがあるって言ってた。プロポーズするんだと思うわ」「そうなんですか？」「そうよ。私たち今、同じ町にいるわ。申し出を受けるつもりだとほのめかしておいたの。6月の予定は空けたし。それにね、私が相手なんだから（プロポーズするに決まってるわ）」

ここでは、「文句のつけようのないこの私が相手なんだから、彼がプロポーズしないはずはない」という Katherine の個人的見解であり、Tess の知らない情報をあたかも承知済みの情報であるかのように提示して、Tess を納得させている。

談話標識を用いることで、話し手はまた別の策略をめぐらせることがある。自分にとって都合の悪いことを伝える場合、真実でないことを真実であるかのように断定的な表現をすることによって、逆に真実を隠そうとすることがある。たとえば actually には先行発話の内容を強める

機能がある。次例の Susan は Barbara とその夫 Oliver の召使である。この夫婦は全てにおいて満たされた生活を送っていたはずであるが、突然 Barbara は Oliver に離婚の申し立てをした。

（3）Susan：Sorry to disturb you... but I was wondering if I could borrow a sleeping tablet.

Barbara：Did Oliver send you for it?

Susan：No. *Actually*, no. Well, all right, you got me there, which is good because I'm uncomfortable with the charade.—*The War of the Roses* [映画台本] [召使の Susan が寝室をノックして]「お邪魔して申し訳ありませんが…睡眠薬をちょうだいできないでしょうか」「オリバーに頼まれたの？」「いいえ。いえ、絶対にそんなことありません。あのぅ、えぇ、もうお分かりですよね。構いません、私はお芝居は苦手ですから」

Susan は actually で「ご主人様に頼まれたのではない」ことを強調しようとするが、すぐに Barbara に真実を見抜かれていると思って観念する。

このように、話し手は談話標識を用いることで発話の意図を聞き手に効果的に伝えようと策略を企てることがある。

3．対人関係に関る機能：face-saving

3.1　コミュニケーションにおける face

コミュニケーションはことばをやり取りする参与者の相互作用的活動（interaction）である。相互作用的活動を円滑に進めるためには、コミュニケーションの社会的側面に留意する必要がある。コミュニケーションは常に危険を孕んでいると先述したが、Brown & Levinson はポライトネス理論で、誰かに話しかけると話しかけられた側は何らかの反応を示さなければならず、話しかけられた側は面子を脅かされることになるとして、これを face threatening act と呼んだ。また、Leech は円滑なコミュニケーションにおいては対人的な気配りが重要であり、その気配りの拠り所となる Politeness Principle（丁寧さの原理）を提唱した。Politeness Principle は簡単に言うと「相手に対する利益や賞賛などは大きく、自分に対する利益や賞賛などは小さくする方がより丁寧になる」というものである。彼が Politeness Principle を Grice が提唱した Cooperative Principle（協調の原理）[4] と同列に扱っていることからも、コミュニケーションにおける対人的・社会的側面の重要性が分かる。また、Goffman はことばのやり取りを社会的な

やりとりと捉え、face（面目・顔）の概念で分析している。

相手の face を脅かす可能性のある行為をする場合、話し手は言いたいことをあからさまに言わずに何らかの工夫をこらして意図を伝えようとする。このように対人関係に気を配り相手の face を尊重する（face-saving）ことばの使い方をする方法として、丁寧表現や伝えたいことを間接的にほのめかすことが考えられる。この章では、face-saving に談話標識がどのように貢献しているかを見て行く。

3.2 actually：予防線機能

相手の発話に対する不賛成をやんわり伝えるのに、談話標識は重要な役割を果たす。well、 in fact、actually の例を見てみよう。

（4）A: It is raining.

B: a.	( ), it is drizzling.	well	*in fact	actually
b.	( ), it is pouring.	*well	in fact	actually
c.	( ), it is snowing.	*well	*in fact	actually

(Smith & Jucker, p. 214)

A の発話「雨が降っている」に対して B が a〜c のように応える場合、a では in fact が、b では well が、c では well と in fact が用いられない。well は先行の主張の事実性に異論があるわけではないがもう少し弱く主張する場合に（downgrading of the claim）、in fact は後続の主張が先行部分の強い主張である場合に（upgrading of the claim）用いられ、actually は後続部分が反論であることを知らせるのに用いられる一般的な表現である（general-purpose signal for a counterclaim）(Smith & Jucker, pp. 216-17)。いずれの表現も、これから反論することを予め聞き手に合図する機能を持っている。それによって相手の発言を一刀両断に否定してしまうのではなく、相手の face を尊重する気配りが示される。

actually には先行発話で表される予想や見せかけと、後続発話で表される真実や現実とのズレを話し手が認識して、意外感や驚きの気持ちを抱いて真実や事実を再確認する用法がある。ここから actually は上述のように不賛成を予め伝える機能が生じる。さらにそれを拡張させて、話し手側からすると後続する発話に対する聞き手の何らかの衝撃（驚きや不快感など）を和らげる機能が、聞き手側からすると話し手の発言内容がある程度予測可能になる機能も生じる。

actually がよく用いられるのが、相手の申し出を断る場面である。次例では、姉の Jane が妹の Tess をパーティに誘っている。

（5）Jane：Oh, speaking of work, I am meeting up with some people from the office

tonight for a party. You wanna come?

Tess：*Actually*, I'm having drinks with some friends from Milan.—*27 Dresses* [映画台本]「あぁ、仕事と言えば、今夜、オフィスの仲間が集まってパーティをするのよ。あなたも来ない？」「実は、ミラノの友だちと飲みに行くことになってるの」

Jane は Tess の "Actually" を聞くことで申し出が断られることを察知できるし、Tess はそれを意図している。

しばしば actually は well と共起して、聞き手の驚きや不快感を軽減する。次例の状況は以下の通りである。ロシア革命によってロマノフ王朝最後の皇帝であるニコライ 2 世一家は離ればなれになってしまった。サンクト・ペテルブルグに「ニコライ 2 世の娘である皇女 Anastasia は生きている」という噂がたち、皇太后が彼女を見つけた者に高額の報奨金を与えるらしい。それを聞いた詐欺師の Dimitri らが報奨金を目当てに Anastasia の代役を探していると、それにぴったりの Anya という孤児に出会う。実は彼女は Anastasia 本人なのだが、Anya には幼年期の記憶がない。

（6）Dimitri：Now, let me ask you something, Anya. Was it... there's a last name that goes with that?

Anya：Well, *actually*. This is gonna sound crazy. I don't know my last name. I was found wandering around when I was eight years old.—*Anastasia* [映画台本]「ねぇ、訊きたいことがあるんだけど、アーニャ。アーニャに…続く苗字はないの？」「ええっと、実はね。変だと思うだろうけど、苗字を知らないの。8 歳の時にさまよっているところを見つけられたの」

Anya はこれから相手にとって予想外のことを話すことを予め合図し、同時に自分の苗字を知らないという事実は相手にとって受け入れにくいことであるだろうと気遣っている。

次例も相手を気遣った発言である。Mitch は Harvard のロースクールをトップクラスの成績で卒業し、ある法律事務所で働き始めた。Avery は Mitch の事務所での上司となるが、お互い初対面である。

（7）Mitch：I'm sorry. Can I help you?

Avery：*Actually* I think I'm here to help you. I'm Avery Tolar, your designated mentor. Let's go to lunch.—*The Firm* [映画台本] [自分のオフィスの入り口に立っている男を見て]「すみません。何かご用でしょうか？」「実は君の力になろうと思っ

て来たんだ。私はエイヴァリー・トラー、君の担当教官だ。昼ごはんにでも行こうか」

見知らぬ人から力になろうと思って来たと言われる Mitch の驚きを軽減するために、相手を気遣って "Actually" で発言を切り出している。断定を避ける "I think" の共起にも注意されたい。

次例では相手に負担をかける行為を要求していることを話し手が自覚しているということを示している。ナイロビ英国高等弁務官事務所長の Sandy に対して、弁務官の個人秘書が相談をもちかけている。会議中に電話をかけてきて、申し訳なさそうに次のように発言する。

(8) "Something's come up, I' m afraid, Sandy. I wondered if I might pop down a moment *actually*."—le Carré, *The Constant Gardener*「困ったことが起こったのですが、サンディ。今すぐにお伺いしたいのですが、実のところ」

談話標識の actually は通例文頭で用いられるが文尾で用いることも可能で、文尾の方が丁寧な言い方になり、音調は通例、下降上昇調である (Aijmer, pp. 258, 275)。

これから言いにくいことを言いますがという予防線を張るために actually が用いられることがある。Harvard 大学の宗教象徴学の教授である Langdon が携帯電話を切った直後の様子である。どうやら良くない知らせがあったようだ。

(9) Langdon nodded absently and took a few steps toward the bench. He paused, looking more confused with every moment. "*Actually*, I think I'd like to use the rest room." —Brown, *The Da Vinci Code* ラングドンは放心したような感じでうなずき、ベンチに2・3歩近付いた。そして立ち止ったが、刻々と混乱が増して行くようだった。「実は、トイレに行かせてもらいたいのですが」

断定の力を緩和する I think I'd like to との共起にも注意されたい。

actually は相手の発言を訂正する場合にも用いられるが、訂正される側からすると不愉快なことである。その不快感を和らげるために話し手は予め「あなたの発言が正しくないのでこれから訂正しますよ」という合図を送る。次例はスーパーでの会話である。話し手は買い物中に知り合いではあるが名前を思い出せない男性 (he) に声をかけられた。

(10) "Why are you out running around?" he asked. He was carrying a basket with

nothing in it. "Oh, last-minute stuff, you know. And you?"... "Picking up a few things. Big meal tomorrow, huh?" "Tonight, *actually*." — Grisham, *Skipping Christmas*「何で（買い物に）走り回ってるんですか？」と彼は訊ねた。彼のかごには何も入っていなかった。「あぁ、最後に足りない物を思い出したんですよ。あなたは？」…「ちょっと買い物があって。明日は盛大な食事ですよね？」「今夜なんですよ、実は」

次例は、一流ファッション誌のカリスマ編集長の Miranda とジャーナリストを目指してニューヨークにやって来た冴えない外見の女の子 Andy の会話である。Andy は Miranda のアシスタントになったばかりである。

(11) Miranda：... (to Andy) There you are, Emily. How many times do I have to scream your name?

Andy：*A... actually*, it's Andy. M... my name is Andy. Andrea, but, uh, everybody calls me Andy—*The Devil Wears Prada* [映画台本] [アンディに]「やっと来たのね、エミリー。何度名前を呼ばせるつもり？」「あ、あの実は、アンディなんです。わ、私の名前はアンディです。アンドレアですが、でも、そのぅ、皆アンディと呼びます」

Andy は上司の顔をつぶさないように actually と言ってから、上司の発言を訂正している。

このように、「相手に対する利益や賞賛が小さく」なり、相手の face を脅かす危険性がある場合に、話し手は危険性を小さくして相手の face を尊重する意志があることを予め伝える予防線として actually を用いる。

3.3 oh：カモフラージュ機能

次に本来の意味機能を逆手に取った談話標識の使用例を見る。oh は元来、間投詞として用いられ、話し手が今しがた何かに気づいたり認識したことや何か新たな情報を受け取ったことを示す（Schiffrin; Bolden 2006: 663; Bolden 2008: 318; Nishikawa）。次例は Trentham 伯爵夫人が寝室でメイドに話しかけている場面である。

(12) Lady Trentham：It's a miracle anyone ever gets burgled at all. *Oh*, it's glacial in here. Get my fur, will you? Anyway, it wasn't in the silvery pantry. It's been missing yesterday. Obviously William had it.—*Gosford Park* [映画台本]「強盗に

入られるなんて奇跡だわ。ああ、ここは冷えるわ。毛皮を取ってちょうだい。ともかく、あれ（ナイフ）は銀の食器室にはなかったのよ。昨日からなくなっていたのだから。間違いなくウィリアムが持っていたのよ」

話し手は銀製のナイフが盗まれたことについて話しているが、ふと寝室が寒いことに気づいて「ここは冷えるわ」と言う。anyway で再び本題に戻る。

次例は友人同士の会話である。Nate はシェフで Andy の心の支えになっているが、仲たがいしてしまう。しかし、Andy は Nate が正しかったと気づく。

(13) Andy：Nate. I'm sorry.

Nate：I... I flew up to Boston while you were gone. Interviewed at the Oak Room.

Andy：And?

Nate：And you're looking at their new sous-chef. I'm moving up there in a couple of weeks.

Andy：Oh, that's great. Congratulations. *Oh.* I don't know what I'm gonna do without late-night grilled cheeses, but...—*The Devil Wears Prada* [映画台本]「ネイト、ごめんなさい」「僕…君がいない間にボストンに行ったんだ。（一流のステーキハウスの）オークルームの面接を受けにね」「それで？」「それで、今、君は新しい副料理長を目の前にしてるってことさ。2・3週間でボストンに引っ越すつもりだ」「まぁ、すごいじゃない。おめでとう。あっ。（あなたがよく作ってくれた）深夜のグリルド・チーズ・サンドウィッチがなくなったらどうしていいか分からないけど、でも…」

Andy は Nate にお祝いの言葉を述べるが、ふとグリルド・チーズ・サンドイッチのことを思い出したのである。

間投詞の oh と談話標識の oh の明確な線引きは困難であるが、本論では何かに対する本能的な反応や感情を示す場合は間投詞、間投詞の機能を拡大して談話的な機能を持つ場合は談話標識と考える。

談話標識の oh は、話題転換の合図として用いられることがある（Carter & McCarthy, p.219; Bolden 2006)。話題転換を示す談話標識には now, anyway, so, by the way などがあるが、oh は間投詞の「気づき」の機能を反映して、突然思いついて話題を転換する場合に用いられる。

(14) A：Anyway he's not that much younger. I mean he's older than Mark and Mike.

But erm he's erm =

B：*Oh* what's Mark's other name?

A：Hubbard.

B：Hubbard.—Carter & McCarthy, p. 219「とにかく、彼はそんなに若くはないよ。つまり、マークやマイクより年上だってことだ。でも、彼は…」「あ、そうだ、マイクの苗字は何だっけ？」「ハバードだよ」「ハバードね」

oh の「気づき」の特徴を利用して、実は最初から話そうと思っていた大切なことではあるが、今気づいたかのように装って相手に心理的な負担をかけないように話し手が相手に対する気遣いを示すことがある（cf. Nishikawa)。次例の Lamar は弁護士、Mitch は様々な法律事務所からスカウトされている優秀な弁護士の卵で、Oliver は Mitch が声を掛けられている法律事務所の先輩である。Mitch はどの事務所で働こうか思案している最中である。

(15) Lamar：Marty was... his twin girls are a month older than our son.

Mitch：I'm very sorry, Lamar.

Lamar：*Oh*, uh, by the way, Oliver wanted me to tell you... you shouldn't be burdened with a student loan.

Mitch：Excuse me?

Lamar：If you bring the papers by tomorrow, the firm will repay it for you.—*The Firm* [映画台本]「(亡くなった) マーティは…彼の双子の娘はうちの息子より 1 カ月大きいんだ」「本当に気の毒だと思うよ、ラマー」「あぁ、そうだ、ところで、オリヴァーが君に話してくれって…学生ローンを負担する必要はない」「えっ？」「明日までに書類を持って行けば、事務所が君の代わりに返済してくれるよ」

ためらいを表す uh と話題転換を示す by the way との共起にも注意されたい。

次も同様の例である。時は 1930 年代、イギリスのある貴族の邸宅では上流階級の人たちを集めて優雅なパーティが催されている。Weissman は招待客の一人でハリウッド映画のプロデューサー、Jennings は邸宅の執事である。

(16) Weissman：Well, thank you very much, Mr. Jennings.

Jennings：Just Jennings, sir.

Weissman：All right. Just Jennings. *Oh*, by the way, I've booked a telephone call to California and I'd appreciate it if you would get me as soon as it comes through.

Jennings：Very good, sir.—*Gosford Park* [映画台本]「えぇっと、どうもありがとう、ジェニングス君」「ただのジェニングスで結構です、旦那様」「分かったよ。ただのジェニングスね。あぁ、ところでカリフォルニアへの電話の予約をしてあるのだけれど、つながり次第、知らせてもらえればありがたいんだが」「はい、かしこまりました、旦那様」

この例でも話し手は大仰な命令口調にならないように、相手の執事に対する気遣いを見せている。

このように談話標識の oh は話題転換の合図として用いられるが、間投詞の oh が「今、ある事に気づいた」ことを表すという特徴を利用して、話し手は予め意図的に話題を変えようと意図していたのではないと自分の態度をカモフラージュできる。

4．発言と場面の主導権

4.1　話題転換と場面展開の so

so は元来、指示的な意味を持ち、発話状況で示される様態や程度について言及して「その [この] ように、この [その] 程度に」の意を表す。前述の内容を受ける代用表現として「そう (思う、する)」「本当に [実際] (…が) そうである」の意も表す。さらに so の機能化が進み接続詞として論理的な結論を導入して「その結果、それで、だから」の意でも用いられる。談話標識としては、論理的なつながりだけでなく、発話と発話、発話と状況などを話し手の推論によって幅広く結び付ける機能を担う。さらに、次節で述べるような談話構成や進行の調整機能を持つ。

ところで、3 章で談話標識の oh は、話題転換の合図として用いられることがあると述べた。Bolden (2006) は新たな話題を始めたり新たな展開をする発話に先行する oh と so を考察し、以下のように述べている。

> "so" and "oh" are flexible interactional resources that can be deployed to achieve interpersonal effects that are specific to each interactional situation. (p. 681) [下線部は松尾による]

"interactional"、"interpersonal" という語が 3 度も使われているように、oh と so は談話において対人関係に関る機能を有している。so と oh の違いについては、so は後続発話が今しがた話し手の心に浮かんだものではなく、幾分かの間話し手の心に留まっていたことである傾向があり、oh は今しがた話し手の心に浮かんだり認識したり気づいたりしたことである傾向があると

する（Bolden 2006: 663; Bodlen 2008: 318)。談話標識 oh は間投詞 oh に由来し、話し手が今しがた何かに気づいたり認識したこと、何か新たな情報を受け取ったことを示すのに対して（cf. 3．3)、so が指示的な意味や結論を導く機能を持つことから両語の違いが生ずる。

4.2 発言の主導権

so には本題から脱線したり、関連する内容の話題や他の話題を話した後で、元の話題に戻す機能を持つ。本題というのは、話し手が予め話そうと思っていた事柄である。通例、so の後に休止が置かれ、下降音調になる [Bolden 2009; Ball, p. 99]。so を用いることで話し手は発言の主導権を握ることになる。次例は近所に住む友人同士の会話である。話し手は相手の友人の娘 Blair の婚約者のことをかねてから知りたがっていた。

(17) "How's Bev?" "She's having a good day, thanks. We started to come over and see Blair, but the snow started. *So*, how's the fiancé?" "A very nice young man," Luther said. —Grisham, *Skipping Christmas*「(奥さんの）ベヴは元気かい？」「今日は調子が良かったよ、ありがとう。僕たち 2 人でうかがってブレアに会うつもりだったんだけど、雪が降り始めたのでね。で、(ブレアの）婚約者はどんな人だい？」「すばらしい若者だよ」と、ルーサーは答えた。

話し手にとっては本題である Blair のことを so 以下で持ち出して、会話の流れをコントロールしている。

次例はウォール街の若手証券ブローカーの Bud と彼の顧客である証券業界の大物で資産家の Gekko との会話である。Bud はやっとのことで Gekko と取引するチャンスをつかんだ。

(18) Bud：It' s a very nice club, Mr. Gekko.

Gekko：Yeah.... I just go on the board of the Bronx Zoo. It cost me a mil. That's the thing you gotta remember about WASPs. They love animals, but they can't stand people.

Bud：Uh, Mr. Gekko? (clears throat) *So* we took a little loss today. Uh, we got stopped out on Terafly. About a hundred grand.—*Wall Street* [映画台本]「とてもいいクラブですね、ゲッコーさん」「あぁ。… ついこないだブロンクス動物園の役員になったんだ。100 万ドルかかったよ。ワスプのことでは覚えておくべきことだ。彼らは動物は大好きだが、人間には我慢出来ない」「そのぅ、ゲッコーさん？（咳払い） 実は今日、少し損をしました。そのぅ、テルフライでやってしまいました。10

万ドルほど」

Bud と Gekko はしばらく雑談をするが、Bud は咳払いの後、本題の株の取引のことを持ち出している。これから大切なことを話すことを聞き手に知らせるために、話し手は so を戦略的に用いている。

次例では so で命令文を導入することによって、話し手は発言権と同時に談話場面進行の主導権をも握っている。

(19) "That's good. The important thing about mistakes is that we learn from them. *So* let's go over your proposed operation." —Clancy, *Patriot Games*「よかろう。大事なのは間違いから学ぶことだ。さて、君の提案している作戦から検討しよう」

談話場面の主導権を握ることによって、発話の順番取りで優位に立つことができる。次例は、話し手がずっと会いたいと思っていた男性に会えた場面である。

(20) It was Molly who finally took the initiative. "*So*," she said, offering her hand. "It's good to see you again."—Cristofer, *Falling in Love* ついに主導権を取ったのはモリーだった。手を差し出しながら「で、またお会いできて嬉しいわ」と彼女は言った。

それまで話されていた話題が一段落し、すぐに別の話題が始まる気配がないような場面でとりあえず so で会話をつなぐことができる (Bolden 2009: 990)。so と言うことで、自分が発言する意志があることを聞き手に知らせる話し手の戦略である。例を見てみよう Chris は名門出身の州議会議員、Marisa は彼が宿泊しているホテルのメイドである。Chris と Marisa、そして彼女の息子の Ty がホテルを出たとたん、Chris のスキャンダルを追っているマスコミに囲まれる。Chris は 2 人に先に公園へ行くように命じ、マスコミの相手をする。その後彼は 2 人を追って公園にやって来た。

(21) Marisa：Okay. Oh, cool. I won't get dirty. Oh, Lord! I almost sat on your face. Right there.

Chris：*So*, um, Ty seems like a terrific kid.—*Maid in Manhattan* [映画台本][マリサは公園のベンチに雑誌を置いて座ろうとする。表紙にはクリスの写真が載っていた]「良かった。汚れなくていいわ。まぁ、何てこと！　あなたの顔の上に座るところだったわ。ちょうどここの所に」「ところで、えー、タイはいい子みたいだね」

ためらいを表す um の共起に注意されたい。

これらの例から分かるように、聞き手の注意を話し手の発言に向けて欲しいこと、話し手の関心事である本題をこれから持ち出すこと、その場の発言と談話進行の主導権が話し手自身にあることを戦略的に伝えるために、so が用いられる。

4.3 場面の主導権

so は指示的な意味や結論を導く機能を持つので、通例は so が参照すべき先行発話や状況がある。しかし、談話戦略的に so が場面の冒頭で用いられることがある。それによって話し手（書き手）は参照すべき情報や状況を聞き手（読み手）と共有していることを暗示する。話し手（書き手）が聞き手（読み手）に対して、「あなたとの共有知識や情報があるので、それを思い起こしてください」と暗に伝えることで、発話場面に聞き手（読み手）を引きこむことができるのである。次例は、邸宅に上流階級を招いたパーティを催したホスト役である貴族の書斎に妻の妹の Louisa が入って来た場面である。

(22) Louisa：*So* who's the funny little American?—*Gosford Park* [映画台本]「で、あのおかしな背の低いアメリカ人は誰ですの？」

Gosford Park という映画のあるシーンの冒頭である。so によって映画を見る側（読み手）は、問題になっているアメリカ人が先のシーンに登場したか、聞き手である貴族の頭の中にその存在があることが分かる。"*the* funny little American' の定冠詞 the にも注意されたい。

次例も場面の冒頭である。Mickey は老弁護士、Galvin は元エリート弁護士である。Galvin はある事件をきっかけに落ちぶれて、酒びたりの毎日を過ごしている。心配した Mickey は、Galvin にカトリック教会経営の大病院で依頼人の妹が誤まった麻酔処理を施されて植物人間になった事件を担当するように計らい、Galvin はその事件に取り組んでいる。この場面では、2 人が担当の事例の検討をしている。

(23) Mickey：*So*, what've we got?
Galvin：Well, we've got her sister.—*Verdict* [映画台本]「それで、こちら側の手がかりは？」「姉がいる」

この例では so を用いることによって、このシーンの前に 2 人がこの事例について何らかの話をしていたことが暗示される。

5．おわりに

談話標識を用いることで、話し手は発話の意図を聞き手により効果的に伝えようとしたり（2章)、対人関係に気を配り相手の face を尊重する努力をしたり（3章)、発言や場面の主導権を握り会話や談話の流れをコントロールしようとする（4章)。

本論では、コミュニケーションのゴールである social interaction を首尾よく達成するのに、談話標識が大きな貢献をすることを例証した。

注

1．Sperber & Wilson、Blakemore 参照。

2．the listener may or may not access the context needed to interpret an utterance as intended by the speaker. (Smith & Jucker, p. 209)

3．この場合、強勢は all に置かれる。

4．これには以下の 4 つの Maxim（公理）がある。Maxim of Quantity（量の公理）[(多過ぎることなく少な過ぎることなく）適切な量の情報を与えよ]、Maxim of Quality（質の公理）[真でないと知っていることや真であるという十分な証拠がないことは言うな]、Maxim of Relation（関係の公理）[関連性のあることを言え]、Maxim of Manner（様態の公理）[明瞭に、簡潔に、順序立てて話せ]

参考文献

Aijmer, K. 2002. *English Discourse Particles: Evidence from a corpus.* Amsterdam: John Benjamins.

Ball, W. J. 1986. *Dictionary of Link Words in English Discourse.* London: Macmillan Language House.

Blakemore, D. 1992. *Understanding Utterances: An Introduction to Pragmatics.* Oxford: Blackwell.

Bolden, G. B. 2006. "Little Words That Matter: Discourse Markers 'So' and 'Oh' and the Doing of Other-Attentiveness in Social Interaction." *Journal of Communication.* 56 (4), pp. 666-688.

—. 2008. " 'So what's up?': Using the Discourse Marker *so* to Launch Conversational Business." *Research on Language and Social Interaction.* 41 (3), pp. 302-337.

—. 2009. "Implementing incipient actions: The discourse marker 'so' in English." *Journal of Pragmatics.* 41, pp. 974-998.

Brown, P. and S. Levinson. 1987. *Politeness: Some universals in language usage.* Cambridge: Cambridge University Press.

Carter, R. & M. McCarthy. 2006. *Cambridge Grammar of English.* Cambridge: Cambridge University Press.

Grice, H. P. 1975. "Logic and Conversation". In Cole, P. and J. Morgan (eds.) *Syntax and Semantics*

3: Speech Acts. pp. 41-58. New York: Academic Press.

Goffman, E. 1967. *Interaction ritual: essays on face to face behavior.* New York: Garden City.（浅野敏夫訳『儀礼としての相互行為—対面行動の社会学』法政大学出版局 2002）

Leech, G. 1983. *Principle of Pragmatics.* Harlow: Longman.

松尾文子. 1997.「推論を表すつなぎ語 so と then」『英語語法文法研究』4, pp. 135-147. 英語語法文法学会.

—. 2008.「談話辞 actually の機能の展開」『論集』41, pp. 78-88. 梅光学院大学紀要編集委員会.

—. 2009.「英語の談話標識の特性 及び 日本語との比較」『論集』42, pp. 30-44. 梅光学院大学紀要編集委員会.

—. 2010.「談話標識の特質：単独で用いられる談話標識を手がかりに」『論集』43, pp. 43-54. 梅光学院大学紀要編集委員会.

Nishikawa, M. 2010. *A Cognitive Approach to English Interjections.* Tokyo: Eihosha.

Raymond, G. 2004. "Prompting Action: The Stand-Alone 'So' in Ordinary Conversation." *Research on Language and Social Interaction.* 37（2）, pp. 185-218.

Schiffrin, D. 1987. *Discourse markers.* Cambridge: Cambridge University Press.

Schourup, L. and T. Waida. 1986. *English Connectives.* Tokyo: Kuroshio-shuppan.

Smith, W. S. and A. H. Jucker. 2000. "*Actually* and other markers of an apparent discrepancy between propositional attitudes of conversational partners." In Andersen, G. and T. Fretheim (eds.) *Pragmatic Markers and Propositional Attitudes.* pp. 207 - 237. Amsterdam: John Benjamins.

Sperber, D. and D. Wilson. 1995[2] . *Relevance: Communication and Cognition.* Cambridge: Blackwell.

引用作品

[映画]

Anastasia. 1999. フォーインクリエイティブプロダクツ.

The Devil Wears Prada. 2008. 株式会社フォーイン スクリーンプレイ事業部.

The Firm. 1997. フォーインクリエイティブプロダクツ.

Gosford Park. 2002. 株式会社スクリーンプレイ.

I Am Sam. 2002. 株式会社スクリーンプレイ.

Maid in Manhattan. 2003. 株式会社スクリーンプレイ.

27 Dresses. 2009. 株式会社フォーイン スクリーンプレイ事業部.

The Verdict. 1995. スクリーンプレイ株式会社.

Wall Street. 1994. フォーインクリエイティブプロダクツ.

The War of the Roses. 1993. 株式会社フォーイン スクリーンプレイ事業部.

Working Girl. 1994. フォーインクリエイティブプロダクツ.

[小説]

The Constant Gardener. 2001. John le Carré. Pocket Books.

The Da Vinci Code. 2003. Dan Brown. Doubleday.

Falling in Love. 1985. Michael Cristofer. Grafton Books.

Patriot Games. 1987. Tom Clancy. Berkley Books.
Skipping Christmas. 2001. John Grisham. Dell Books.
The Sky Is Falling. 2001. Sidney Sheldon. Warner Books.